

もっと私たちのことをよく見て

会津若松市立第二中学校 1年 竹村 凜生

私の近所には障がいのある姉妹がいました。姉妹は私より年上の二人姉妹で、お姉さんも妹さんも車椅子に乗っていました。一緒にバーベキューをしたり、遊びに行ったりと、私たち家族ととても仲良くしていました。バーベキューの時に父の作ったかぼちゃスープを、とても美味しそうに飲んでいました。

ところが、去年の五月に妹さんがなくなってしまいました。学校で痰が詰まってしまったそうです。私はそのことを知った時、頭が真っ白になりました。数日後、私たちはお通夜に行きました。お通夜で会ったご両親は、いつもは明るいのにとても暗い表情をしていました。

「妹さんは明るい人だったな。」「お姉さんやお父さん、お母さんといつもにこにこしていたな。」などと、妹さんのことやお家族のことを思い出しながら、私は参列していました。すると、お通夜で次のような言葉が聞こえてきました。

「姉妹のご両親、二人も障がいのある子どもがいたら大変だっただろうね。いくら障がいがあるといっても自分の子だもん、少し悲しいよね。」

その人には悪気はなかったのかもしれませんが、でも私は、「障がい児の死は、普通の子の死より悲しまれていない」と思ってしまい、「完全に偏見だな」と感じました。そして腹が立ち、「なんでそんなこと言うの？妹さんは障がい児の前に、世界にただ一人だけの人だったんだよ！」という思いが込み上げてきて、寂しく、悲しくなりました。

私は「世界にはたくさんの障がいのある人がいるのに、障がい児の死は普通の子の死より軽く見られたり、親の大変さの方が注目されてしまうことがある」と思っています。

私には脊髄性筋萎縮症という障がいがあり、足などがほとんど動かず、車椅子に乗っています。腕や膝などが曲がっている部分もあり、首も動きづらいです。私はよく、「障がいがあるから。」「障がいがあるからできないことが多い。」といった決めつけの言葉を耳にします。そういう言葉を聞くと、とても嫌な気持ちになります。「障がい者だからって決めつけないで！」と思います。

なぜなら、障がいは人によって全く違うし、できること、できないこともみんな違うからです。こういった言葉は、私だけでなく、多くの障がいのある人や他の誰かにも向けられているかもしれません。

だから私は、「もっと私たちのことをよく見てほしい」と思い、発信することが大切

だと思いました。発信すれば、みなさんの思い込みが少なくなるかもしれません。それは、難しいことではありません。もし私が友達や初めて会った人などに障がいのことを聞かれたら、丁寧に説明すれば良いだけです。

他にも、障がいのある人とない人が話す機会が増えるといいと考えています。お互いにコミュニケーションを取る機会が増えれば、誤解も少なくなると思います。

今の生活の中で、障がいのある人に声をかけることが少ないと私は感じています。たとえば、説明を受ける時や何かを渡される時に、私が目の前にいるのに、付き添っている親や介助者の方が話しかけられることがよくあります。

だからこそ、みなさんには私たち本人に話しかけてほしいです。そうしていただければ、「障がい者ができないことを決めつけないでほしい」という思いや、「障がいのない人にも決めつけをしてほしくない」ということを、私たちから伝えることができます。

そうすることが、「誰もが人の言葉で傷つかない、偏見のない社会」を作る第一歩になると思います。

将来は、当事者の声を集めて、「社会にはいろいろな障がいがある人がいること」「その人たちができること、できないこと、助けてほしいこと」を伝えられる団体が、パンフレットを作ったり、SNSなどで発信したりできたらいいと思います。

でも、今の私にできることは、この作文を通して、少しでも多くの人に障がいのことを考え直してもらったり、もっと深く考えるきっかけにってもらったりすることだと思います。

そして、みんなで偏見のない幸せな社会をつくっていきましょう。